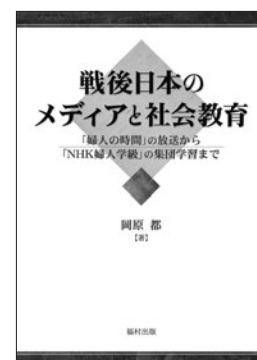


岡原 都

## 戦後日本のメディアと社会教育

『婦人の時間』の放送から『NHK婦人学級』の集団学習まで

(2009 福村出版 320p 5,000円+税)



小玉美意子

本書は、1945年10月から63年3月までNHKで放送された『婦人の時間』と、それにつづき1972年まで放送された『NHK婦人学級』との、実に四半世紀を超す番組の内容と、その放送意図、果たした役割について分析した労作である。

本書の論評に入る前に、両番組企画の背景を解説させてもあおう。

第二次世界大戦直後は占領軍がやってきて、日本のそれまでの価値観を180度変える作業を多くの分野で行った。軍国主義から民主主義への転換、財閥解体や農地改革など、政治経済の方針と連動しつつ、社会的には教育やメディアという思想変革の道具を駆使して啓蒙を行った。学校の児童・生徒たちには学校教育を通じて「民主主義」や「文化」を教え込むことができたが、大人の考えを急に換えさせるにはそれでは間に合わない。社会を改革するのにもっとも効果的な手段は、一度に全国に伝わるラジオであった。

日本政府は、戦前・戦中を通じ国民に国の意図を伝えるためラジオの普及を図った。日本の敗戦がかくも速やかに整然と国民に受け入れられたのは、「天皇」という最高権威の生の声と、それを聞かせるラジオが全国にいきわたっていたからである。

当時、放送といえばNHKラジオだけだったが、放送先進国であったアメリカ占領軍はただちにそれを利用した。一般向けには『真相はかうだ』など、情報統制のため戦時中日本人が聞かされていなかった話を放送したり、アメリカ側から見た戦争の別の面を語ったりした。軍国主義を否定する立場から、戦前には政府から危険視されていた人も登用して、占領軍は日本に新しい民主主義教育を試みた。

そういった中で目を付けたのが、日本女性の教育である。選挙権もなく、家制度のもとでしばられていた日本女性を教育することは、社会変革にも彼女ら自身

のためにも意味あることだとして、『婦人の時間』をスタートさせた。

では、順次本書のあらましを紹介しつつ、議論していきたい。

本書の構成は、まず、占領時代の米軍主導による番組づくりの背景と実態から始まり、放送利用の集団学習の紹介、『婦人の時間』の放送内容の分析、そして、『NHK婦人学級』運動の成果と問題点について言及し、結論にいたるという形である。

第1章「戦後社会教育の出発—日米両政府の期待を担って」では、敗戦後の日本がGHQの指導のもと、日本側の協力があったり成り立ったことを「終戦後の日本の『言語空間』は、……親米的でリベラルな新リーダーたちと旧体制側のリーダーたちの奇妙な混成集団によって形作られていった」と表現している。

「思想戦争をしかけるCIE『部隊』にとって、社会的に無力であったが故に旧秩序とは無関係にあった……いまや選挙権を得た女性たちの層は、重要な手駒であった」とし、GHQは新日本を建設するのに女性の意識改革が重要であるとの認識で番組を企画した。

『婦人の時間』は、目的と内容から二つに区切ることができる。初期の1945年10月から46年4月の間は、「ひたすら女性有権者の啓蒙に焦点が当てられ、選挙の心構え、とりわけ『人物に依らず、政策によって』候補者を選ぶようにという指導が行われた」。すなわち、来るべき戦後初の総選挙で女性が初めて選挙権を行使するのであるから、そのための教育をGHQの意図にそった形で行ったのが第一期である。

その後は、徐々に生活に密着したものに変更し、東西冷戦が始まった後は、民主主義教育だけでなく資本主義教育にも踏み出したというのが、著者の指摘である。特に、1949年の第二次米国教育使節団は、「啓蒙された選挙民は反共への基礎である」との考えを明確に

打ち出したことから、著者はそれが「日本の資本主義促進への決意表明である」と見て、米側の政治的意図を強調し、批判的スタンスをとる。もちろん、当時の放送はGHQの管理下にあり日常的に検閲が行われていたので、そのとおりである。しかし、それは自明のことと考えるのはジェネレーション・ギャップだろうか。

同時に、65年経った今も我々が受け入れている民主主義精神がその中には含まれているので、批判的な面だけではないだろう。また、彼らが日本にもたらした放送編成の技術は、その後の放送番組制作にも役立つなど、多面的な影響がある。そして、CIEが力を入れた46年4月の初の総選挙では女性が39人当選して、その記録は2005年の総選挙まで59年間、破られることがなかった。女性の意識向上に効果があったが、これとのつながりを著者はどう説明するか。

次に番組は、内容的な理解を促すだけでなく、日本各地に女性リーダーを作ることを要請された。1949年から同番組では、団体運営や会議の進め方の大々的な教育を行うことになる。それまで、週一回のコーナーであった「婦人学級」が、『NHK婦人学級』という社会教育番組として登場。「地方での慢性的な指導者不足はこういう形で巧みに解消されることになった」とし、第2章で語られる。

1948年から「ラジオの集い」という視聴者グループ作りがアピールされ、1959年には865グループ、9,443人が参加したが、ピークの68年には28,206グループ、331,326人に達した。年に一度は「夏のつどい」として全国大会が開かれて、発表技術を磨き、「戦後言説をもつ地域リーダーが生まれて行く素地がととのっていった」という。同番組が女性の社会参加と言語空間への進出を後押ししている様子がたどれる。なお、このころからテレビが普及してきたので、番組もラジオとテレビの両方が用いられた。

『NHK婦人学級』の内容については第3章で分析している。基になるのは世話人たちが書き残したメモで、著者が1959年から72年までの記録を1年ごとに丹念に整理して巻末につけてある。

「年を追ってテーマを見ていくと、番組が発足してから5年間、1964年の池田勇人政権終焉までの時期が、一番社会教育らしい内容で充実していたようである」「女性に社会意識や権利意識をもたせるべくしっかり教育している」が、それ以降は、「内容的にも精彩

に欠けて行った」。その理由と思われるものに「古い農村社会の解体と都市への労働力の移転、それに農業の市場経済化が奨励されているように見える」という記述がある。

ここで著者が述べている「社会教育らしい」というのはどういう意味かもう少し説明がほしい。市民としての意識の向上に役立つ内容がそうなのか、そして、消費型、市場経済の中で生きることについての学習はそうでないのだろうか。もちろん、今の日本を見ればそれが行き過ぎた結果、問題をたくさん抱えているのはわかるが、その当時の日本に生きる女性たちにはどうだったのか。

その一方、この章の最後では、『NHK婦人学級』は声の創造を行ったのである」とし、「しかしそれは、人工的に調整され、日米の軍事・政治・経済の協調路線というディスコースに沿った声であった」とまとめる。そうであれば、それは「声の創造」というよりは、「女性たちに発言の訓練をし、発表の機会を与えた」のかもしれない。主体的に考えることを進めている割には、『NHK婦人学級』は主流の人々が用意した内容に従っていることは著者も述べている。ここから従来の男社会を否定する日本流ウーマンリブでも生まれているなら「声の創造」になったと思うが。

また、この章で少し気になるのは、番組テーマから内容を「推測」しているだけで、実際の中身の吟味は行われていないことだ。それは資料として保有しているのが「テーマだけ」なので仕方がないとも言えるが、内容把握がないと少し説得力に欠ける。

第4章は、NHK放送博物館に残る台本（59年から63年の間に放送されたものの中の31本）をもとに、当時の放送を台本から垣間見ようとする試みである。

59年4月の台本では、「お手本を映像で示して、それをまねることから始めるようにさせる意図である」という。ここでは、話し合いのし方について、講師たちが各々指導すると書いている。以前は人前で話すことさえ憚られた女性たちが、やっと話せるようになる過程がよく見える。

「資本主義下では、自立する主体としての『我』が『自由』に人生を選び取っていくという体裁をとる」「実際にはそれは、無産階級の若者が、親から切り離されて一個の取替えの自由な労働力として労働市場に放り込まれ使い古されていく」との考えを述べて、『NHK婦人学級』の話が「アメリカ的な生活を触媒と

した消費行動の促進に照準が当てられているようである」として著者は違和感を示す。

番組はその一方で、農村の変革、地主と小作人などの問題、憲法や民主政治、基本的人権、自由、平等、権利、一票の行使など、憲法にうたわれた内容を具体的に解説するテーマの週も多い。

さて、「NHK婦人運動がもたらしたもの―栄光と消滅」の第5章が社会教育の視点から書かれた本書の中心部分であろう。著者は『NHK婦人学級』に参加した女性たちの活動や感想を自費出版した資料を手掛かりに、参加者たちのライフコースに焦点を当て、社会教育としての成果の検証をした。学級に参加することで家庭から解放される喜び、組織や市民運動に参加するという体験、新しい知識を取り入れ勉強することの知的刺激、時代の進展に重なる学習テーマに関心、といった成果を著者は見出した。

個人の記録から抜き出したものの中には、例えば、「老後の設計」について話し合ううちに福祉の勉強をして、もういちど職業に就こうとした人、また、労働省全国婦人会議の所感文応募を果たした人などもある。さらに、集団学習を通して集団として向上を果たしたグループもあって、そこでは、放送終了から17年たった1989年の段階で、民生委員1人、保護司2人、協助手員1人、補助教員1人、選挙協議会副会長1人、町会役員2人などを輩出しているという。もともと、いろいろな能力と可能性をもった人たちではあったろうが、NHKのラジオ放送と『NHK婦人学級』がきっかけを与えたのは、確かだろう。

この章を著者はこうまとめる。「都市部では公的組織と手を組んだ消費者活動や、資格を入手しての福祉活動などが盛んであったが、地方では意外なことに政治的活動が多く、地域密着型の地道な活動が行われていたようである」「都市部では一部サロン化して、趣味や旅行という楽しみを重視する参加者も多かったようであるが、農村部では収入や直接生活に役立つことに焦点が結ばれていたようである」。『NHK婦人学級』は、ある人々には生活時間割の一部に組み込まれ、それを視聴することが習慣化され、生活のよりどころとなっていたのが著者の分析により明らかにされた。

欲を言えば、どのような人が次への社会貢献につながり、また、どのような人が個人的な趣味としてのそれにとどまったのか、本人の性質、おかれた環境、ジェネレーションによる社会風土の違いなどが分かる

とちょっと面白いので、今後の研究に期待したい。

結論の章で、著者は本書の目的を明かす。「1960年代の日本の高度成長の裏に、日本女性の、妻として、母として、安価な労働力として、賢い消費者として、平和の守護者としての大活躍が潜んでいた事実を明らかにすることが、この研究の目的である」。『婦人の時間』『NHK婦人学級』の中にそのようなテーマがあることは事実だ。しかし、NHKが奨励した組織に参加した人は、世間の中のわずかな人々にすぎないこと、その中身をその通り受け取った人ばかりではないことを考え合わせると、あきらかになったとは言い難いのではないか。前者は標本（サンプル）の問題であり、後者は、メディア・リテラシーの問題でもある。

本書では、保有する文書を一つ一つ丁寧に読み込み、分析を試みていることは評価に値する。しかし、どこか手ごたえが今ひとつという感じがし、それが何なのか理由を考えてみたら、二つのことに思い当たった。ひとつは、放送番組のことを述べているのに、その音声や映像をともなった現実の姿が浮かんでこないことである。もちろん、当時のテープはほとんど残っていないが、一部はNHKアーカイブスに保存されていることがインターネットで確認できた。放送における台本は骨組みとして大事だし、NHKの場合、民放よりは台本に忠実に放送されるのは確かだが、常にその通りというわけでもない。特に、質問は書いてあっても、答えはゲストがその時に応えるものも多いので、議題設定のし方は分かるが、答えの内容はつかめないことも多い。

さらに、ラジオなら音声があればことばの調子がかめて雰囲気わかるし、テレビの場合は映像があれば背景にある状況がつかめる。ことば以外のさまざまな表現がなされている。したがって、今後の課題として、できる限り実際の放送テープを視聴する努力をしてはどうか。もう一つは、『NHK婦人学級』参加者のインタビューである。年齢的に今が聞き取りの最後のチャンスだろう。実際にあって話を聞くと、本人が書いていないことで重要な発言が出てくることが多い。

これは、評者のないものねだりだが、実行できればこの論文がさらに興味深いものになるのは間違いない。骨の部分だけでなく、もっと肉や皮膚のついたものを見てみたいというぜいたくな願望である。

(こだま・みいこ 武蔵大学教授)